

神と神性

(2017年3月12日 前講) 吉野 隆治

神とは、キリスト教徒としては「イエスの父なる神」で、まぎれもないのであるが、ヤーウエとの関係、他宗教の神の存在を考えると簡単ではなく、そのコンセプトを纏めるのは難しかった。フレデリック・ルノワールの「神」という本にめぐりあったことで一つの答えが得られたので、それについて、感銘を受けた点を報告する。

1. 神についてのカントの命題

神の問題は、常に判断の領域か、信仰・確信の領域のどちらかに属する。すなわち、信ずる領域に含まれるものであって、普遍的に真実とされ、万人に証明できる命題しか示せない範疇、すなわち知る範疇には決して含まれない。即ち、神は理性で知る対象ではない。知る我々を含んでいるので知的に判断できず、全人的に判断するのみ。

(従って、神を知ることにはできないため、必然的に理性では疑いを持つ。マザー・テレサですら神の存在を疑ったことがあったが、信仰は疑いを(信仰の試練として)許すものであり、疑いは信仰を失わせるものではない)

2. ヨーロッパにおけるこれからの信仰の形

ヨーロッパの趨勢として、神への信仰崩壊を伴わない脱宗教化が促進している。つまり、諸宗教は社会に対する支配力を次第に弱め、特定の宗教を持たない人が日増しに増大するが、神への信仰がなくなるわけではない。

「宗教団体に所属せずに信仰する」という信仰の新しい形で、時代の大きな流れとなっている。宗教組織に縛られていた個人が次第に解放され、礼拝等の宗教儀礼から遠ざかっていく一方で、多くの人が神を信じ続け、個人としての霊性を保つという傾向がはっきりと見えてきた。

(このことから、無教会主義キリスト教というものが、世界の潮流に乗っているように感じられる。無教会主義は孤立しているのではなく、今後、世界の主流になるのではないかとさえ思われる)

3. 神と神性

「神性」は言い表せない神の本質であり、全てのものがそこから発する源である。それに対して「神」は、この「神性」が世界に顕現したもの、「神性」とその被造物との関係を表すもの、天啓宗教における人格神、キリスト教諸教会により三位一体として定義された神である。この神には、ヤーウエ、アッラー、三位一体、三神一体等、数多くの名前と顔がある。このような「神性」の把握こそ、宗教多元主義の受容を可能にする方法であり、宗教間の真摯で実りある対話のための主要条件のひとつである。

4. 宗教対立を取り除く思想

どのような啓示宗教も、その時代の文化的、政治的状況と密接に結びついており、その影響を色濃く残している。人々が、神の「言葉」と呼んでいるものは、時代や正確な場所、固有の考え方や権力構造と結びついている。神的存在が預言者や聖典を通して明らかにされることを、否定はしないが、そこでは人間的な要素が、神的な要素と不可分に混ざり合っている。聖典を字義通りに解釈することは、不寛容と暴力につながる。どのような教義も神学論も、文化や言語の制約を受け、理性の限界を超えられない以上、相対的なものでしかない。

宗教に見られる狂信的態度は、聖句、祭祀、伝統、あるいは制度を絶対化することに起因している。

5. ルノワール氏自身の信仰

「時として異端者扱いされることもあるが、私自身としては今もキリスト教徒だと思っている。その理由は、私が「福音書」を拠り所として考える信仰とは、「使徒信条」を唱えることでも、神殿や教会に通うことでもなく、キリストに結ばれて生きること、キリストの愛を受け入れ、彼に倣って隣人を愛することだと思うからである。

私は、心霊の言い表せない奥深さを味わい、内的体験をする一方で、キリスト教の神に向かって、「父」に対するように言葉を掛けることに抵抗はない。また、他宗教の友人たちと彼らの神をときとして拝することに違和感を覚えることはない。」